

ベトナム人学習者を対象にした初級速習コース

— 2016年秋学期の実践と今後の課題 —

The Elementary Intensive Course for Vietnamese Students

— Practice in the Second Semester 2016 and Future Tasks —

学校法人つくば文化学園
日本つくば国際語学院
小野寺志津
ONODERA, Shizu
Tsukuba Bunka Gakuen Educationa Foundation
Japan Tsukuba International Language College

次世代教育学部国際教育学科
安原 凜
YASUHARA, Rin
Department of International Education
Faculty of Education for Future Generations

要旨：本稿は、環太平洋大学グローバルスタディセンターにおける2016年度の秋学期の実践と今後の課題をまとめたものである。本センターでは、これまで韓国人1名とタイ人1名をのぞき、全員ベトナム人留学生で、初級を半年で終えるという速習コースで学習している。毎学期新しい取り組みを行い、学期終了後の学生のインタビューやアンケートから学生の声を聞き、次年度のコース運営を改善するようにしている。2016年秋学期に取り組んだことは、「読みやすい文字」、「相手に通じる発音」、「作文の力、聴解力の早期育成」を組み込んだカリキュラムの作成である。2016年度秋学期終了後に学生にアンケートを採ったところ、「発音の早期学習」、「聴解練習」、「会話練習」、「日本人との交流」を求める声があがり、次年度のカリキュラムにこれらをどのように取り入れるかを考察した。

キーワード：ベトナム人学習者、初級速習、コース運営、日本語予備教育

1. 環太平洋大学における日本語予備教育

本学では2015年10月から、経営学部に進学することを目的に来日した留学生を対象に日本語予備教育を行っている。筆者らは2016年4月の着任以降、グローバルスタディセンター（以下、別科）において、日本語予備教育を担当している。日本語予備教育とは、入学前の留学生に対し、日本語のみを集中的に教授するものである。本学別科は、日本語予備教育の最終目標を経営学部の入学試験合格に定め、初級を半年で学習するという速習コースを運営している。もちろん、母国でのある程度の学習を前提としているが、漢字の読み書きはもちろん、課程終盤には入学試験対策も含めた総合的なコース設定と運営が求められている。

日本における留学生を国籍別に見ると、ベトナム人留学生数は、平成27年度のJASSOの調査で前年比67%増となっており、この状況は継続しているものと考えられる。一方、松田（2016）に、ベトナムは漢字圏に存在する非漢字国で、漢語をルーツに持つ言語で

はあるものの、漢字の使用を継続している日本語と、漢字の使用をやめたベトナム語は近接性が低いと述べられている。漢語と一対一対応する漢越語はあるが、これらは中上級の語彙に多く、残念ながら別科の学生（以下、別科生）が漢越語の恩恵に与ることはほとんどない。ベトナム語と日本語は「文字も文法も発音も全部違う」というのが多くの別科生の言であり、これはコースの運営にあたって大いに留意すべき点である。

本学別科は、春学期は1年課程で定員は20名、秋学期は1年半課程で定員は80名である。設立後間もないが、（1）ほぼ全員がベトナム人留学生であること、（2）速習コースであること、（3）「できるまで補習」の徹底実施、（4）学生管理に力を入れていることが大きな特徴である。これらの特徴は全国的にも極めて珍しいと考える。（3）「できるまで補習」とは、各種テストや宿題を返却し、別科生自身が教科書、ノートを見ながら自力で間違いを訂正するというものだ。訂正ができるまで時間無制限で行うことが多い。正しく

訂正できたかどうかは補習を担当する教員がチェックし、どうしても答えが分からない場合、教員がヒントを与えなんとか正解に導く。(4) 学生管理の一例は、別科初級コース在籍中のアルバイト禁止である。日本語学習に集中できる物理的環境を整えた結果のアルバイトの禁止であり、来日前に伝え、厳格に守らせている。一方、本学には長野(2015)の報告にもあるように、金銭面で不安を抱える留学生が多い。佐藤(2016)からも、そもそも、ベトナム人留学生は本国からの仕送りが少なく、アルバイト収入に頼って生活する傾向が強いことが分かる。別科生も例外ではなく、アルバイト禁止の初級コース在籍中、彼らは常に金銭面に不安を抱いており、その解消の最善策は日本語の早期習得である。これらの状況に鑑み、本学別科には当然、より効果的な教授、より能率的なコース設計及び運営が求められる。そこで筆者らは、2016年度前期終了後、初級コース運営について別科生にインタビューをし、改善点を明らかにした(小野寺・安原, 2016)。次にその改善点を踏まえ、2016年度後期コースを運営した。本稿は2016年度後期を振り返り、改善点を明らかにすること、及びさらによりよいコース運営とは何か、その模索を目的とする。

2. 2016年度前期の改善点

2016年度前期、初級コースを修了した別科生にインタビューした結果と、担当教員の授業振り返りを合わせたところ、次の改善点が明らかになった。①「読みやすい文字を書く」という意識付け、②「相手に通じる発音」の意識化、③作文の力の早期養成、④聴解力の早期養成、⑤①～④を考慮したカリキュラムの作成の5点である。なお、インタビューは2016年度前期新入学生のベトナム人12名と韓国人1名に対して行った。以下、それぞれについて述べる。

① 「読みやすい文字を書く」という意識付け

別科生の宿題、作文等を添削していると、識別できない文字が多いことに気付く。文字はベトナムで学習してきたため、学期中に取上げて取り上げることはしなかった。

日本の小学校では、文字の練習にマス目のあるノートを使う。それが習慣となり、以降ずっと我々は見えないマス目に文字を書き、また読んでもいる。しかし、別科生にはそのような習慣はなく、見えないマス目は存在しない。そのため、一文字を一マスにバランスよく配置するだけでも難しい。その上、「ン」と

「ソ」や「シ」と「ツ」のように、とめ、はね、はらい、書き順を間違えると別の文字になることもある。漢字の偏と旁は一マスを縦に割り、それぞれバランスよく書かなければならない。横書きなら一本の横線上に全てのマス目を並べ、線から下にはみ出すことはない。縦書きなら上から下へ書き、列は右から左へと進むが、ここでも中心に一本線があり、大きくはみ出すことはない。これらは別科生にとって、我々が想像する以上に難しいようだが、伝わらない文字では書く意味がない。別科にて再度文字を取り上げ、「相手が読めるきれいな文字を書く」という意識を持たせるとともに、きれいに書く練習が必要であると判断した。

② 「相手に通じる発音」の意識化

松田(2016)も述べているように、ベトナム人日本語話者は、発音上の不自然さが強い。発話を聞いた日本人が「苦しそうだ」という印象を受けることがある。また、言い直しも多く、これは母語の発音が影響しているためだ。別科の学生はいずれ本学経営学部の入学試験に臨むが、試験内容には面接が含まれており、発音はきれいであるにこしたことはない。そのような観点から2016年度前期に入学した別科生たちを改めて観察すると、河野(2014)にも述べられているようなベトナム人日本語学習者の発音の特徴である「促音を挿入させる誤用」、「無声音化母音拍を促音にする誤用」が顕著である。一般的に発音の矯正には時間がかかるため、来日してすぐに、日本語発音の基礎を教授した方が効果が高いのではないかと考える。

③ 作文の力の早期養成

2016年度前期に初級を修了した別科生へのインタビューで、作文の時間をもっと増やしてほしいという要望があった。また、経営学部の入学試験に読解と作文が含まれていることから、来日した初期の段階から少しずつ書くことに加え、読むことにも慣れておいた方がよい。さらに読解のスキルアップは、日本語能力検定試験対策にもなる。できるだけ文法学習を妨げない形で、かつ、作文、読解、そのフィードバックの時間も含め、スケジュールに組み込めないか一考を要する。

④ 聴解力の早期養成

2016年度前期に初級を修了した別科生から、聴解の時間をもっと増やしてほしいという要望があった。授業内ではディクテーションを行ったり、学習した課の

最後にある聴解問題を扱ったりしたが、それだけでは不十分とのことだった。本学別科では、来日直後から直説法で指導を行っているため、聴解力の差は理解度の差に直結する。聴解力の養成は日々の積み重ねでしか成し得ない。授業内で恒常的に聴解が行えるよう、カリキュラムを見直し、別科の授業を理解するだけでなく、将来的に入学試験に対応できる聴解力を養成する必要がある。また、本学別科生は寮住まいだが、同国人とルームシェアしており、日本語を聞いたり話したりするのは授業内だけという別科生がほとんどである。この状況を打破するためには、授業外でも聴解学習ができる方法を探さなければならない。

⑤ ①～④を考慮したカリキュラムの作成

①～④の改善を行うには、相応の時間が必要である。本学別科の速習コースでどれだけ実現できるだろうか。その鍵は三つある。一つ目は、来日直後に実施するオリエンテーションの時間の活用である。①「読みやすい文字を書く」という意識付けをする際、書き順や注意点の説明が十分に行えれば、後は書いたものをチェックすることで定着度は判断できる。さらにテストのたび、識別できない文字を都度減点し続けることで文字に対する注意を常に喚起することが可能である。もちろん、授業内に練習時間を確保できればそれが最善であるが、速習コースという性格上、自宅学習が可能なのは割愛せざるをえない。難しい文法の説明はなく、スクリーンに映して一斉に確認することができるので、全員が必ず出席するオリエンテーションの時間の一部をこれに充てることとした。

二つ目は、自宅学習の時間の活用である。①から④の全てについて、それぞれ自宅学習用の教材を提供することで、ある程度の自宅学習が可能になるだろう。しかし、本学別科は毎日かなり多くの宿題を課しており、日本語力によっては消化不良を起しかねない。そこで、ウェブ上に教材を準備しておき、学習が可能な学生は自主的にアクセス、ダウンロード、提出という方式を採ることとした。実際のウェブの活用については後述する。

最後は補習時間の活用である。前章でも述べた通り、「できるまで補習」は本学別科の大きな特徴の一つである。2016年度前期、時間割上の補習は週2コマであった。しかし、学習段階が進むにつれ時間が足りなくなり、さらに2コマ追加する週もあった。そこで2016年度後期は週4コマを常設し、必要がない場合は自習時間として教室を提供することとした。

3. 2016年度後期の実践報告

3-1 授業概要

前章に述べた改善点を取り入れ、2016年度後期の初級コース運営を行った。後期の初級コースは全3クラス(A, B, C)、64名の新生と原級留置2名を合わせた66名で、全員ベトナム人であった。授業期間、開講時限などは<表1>の通りである。

3-2. 改善点を踏まえたコース運営

2016年度後期は、前章の改善点を踏まえ、次の5点に重点を置いてコース運営を行った。

① 「読みやすい文字を書く」という意識付け

オリエンテーション中に、「文字」の時間を設け、ひらがな、カタカナを「きれいに書く」練習をした。とめ、はね、はらい、書き順や字形のバランスについても細かく説明をし、学期中も注意をし続けた。さらに、拗音を横線の下にはみ出して書く学生が多く見受けられたため、文字は線の上を書くこと、そして文の最後には読点を打つことも徹底させた。教師が読めないと判断した場合、宿題はやり直し、テストは減点とした。その結果、学生たちの間に「文字はきれいに書かなければならない」という共通認識が生まれた。学部の教員の方からも字が非常にきれいで読みやすいと好評である。

② 「相手に通じる発音」の意識化

学期終盤、初級の学習がある程度進んだ段階で発音の授業を設けた。この段階にしたのは、ある程度の日本語が分からないと、例文を読むこともできないと考えたからだ。担当教員からは、ほとんどの別科生が前向きに参加していた様子が報告されている。別科生はこの授業を通して、日本語の発音の要である拍を意識するようになっただけでなく、自分が苦手な音を認識し、上手くコミュニケーションができなかった時、内省し、修正しようとする様子が見られた。また、撥音は後続の母音と連結させず単独の1拍として発音するなど、日本語の発音規則も理解できた様子だった。

③ 作文の力の早期養成

今学期は、母国での学習の段階によってA, B, Cの3クラスに分けて授業を行った。最も学習が進んだAクラスでは、『読解作文』というコマを設けた。学部の授業のように週に1コマ、15週継続して、読む、書くだけを扱う。この授業で読む練習、書く練習がで

＜表1＞ 2016年度後期初級コース概要

| | |
|----------------|---|
| 授業期間 | 学年暦 15 週：2016 年 10 月 11 日（火）～2017 年 2 月 10 日（金） 補講期間：2017 年 2 月 13 日（月）～3 月 9 日（木） |
| 開講曜日・時限 | 月曜日～金曜日 1～5 限 |
| コマ数および 単位数 | 週当たりコマ数（単位数）計 17 コマ（26 単位） 必修科目 8 コマ（16 単位）、選択必修科目 5（10 単位） その他：補習 4 コマ（0 単位） |
| 授業の概要・ 到達目標 | 四技能を統合的に学習し、初級レベルの日本語力を養成する。 技能別目標 読む：資料から必要な情報が取り出せる。簡単な文章が理解できる。 書く：学んだ文型を使って短文や日常的な内容の文章が書ける。 聞く：日常的な会話の内容が理解できる。 話す：大学生活の場面に応じた短いやり取りをすることができる。身近なことについて説明できる。 |
| 使用教科書・ 教材 | <p>■総合教科書</p> <p>『みんなの日本語初級Ⅰ第2版本冊』 『みんなの日本語初級Ⅰ第2版翻訳・文法解説』 『みんなの日本語初級Ⅰ第2版標準問題集』 『みんなの日本語初級Ⅱ第2版本冊』 『みんなの日本語初級Ⅱ第2版翻訳・文法解説』 『みんなの日本語初級Ⅱ第2版標準問題集』</p> <p style="text-align: right;">上記全てスリーエーネットワーク</p> <p>■漢字の教科書</p> <p>『ストーリーで覚える漢字 300』くろしお出版</p> <p>■その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『書いて覚える文型練習帳』スリーエーネットワーク ・『初級で読めるトピック 25』スリーエーネットワーク ・『やさしい作文』スリーエーネットワーク ・『聴解タスク』スリーエーネットワーク ・『毎日の聞き取り 50』凡人社 ・『ストーリーで覚える漢字 300 ワークブック』くろしお出版 ・自作プリント ・2016 年度前期作成プリント ・『就活・仕事の日本語会話』アスク出版 ・JASSO ウェブ教材 ・新聞社、NHK 等のニュースウェブサイト等 |

きた意義、効果ともに大きい。学期終盤、全クラス対象に文化的な行事や時事ニュースといった長文の読解、それに関する長文の作文という特別課題を実施したが、Aクラスの学生は他のクラスの学生に比べ、取り組みが格段に速く、読解は正確で、作文の内容も豊富だった。だが、学期開始直後から『読解作文』を設けられたのは、既習者が大半で、かつ聴解能力も高いAクラスだったからこそで、他のクラスにおいても可能かどうかは疑問が残る。

Bクラス、Cクラスは、文法の学習を優先させなければならず、読解作文のコマを設けることはできなかった。代わりに「週末作文」として『やさしい作

文』（『みんなの日本語』準拠）から一部抜粋した課題を課し、毎週末作文を書くこととした。文法の時間を削らずに文を書くことに慣れるための苦肉の策で、作文に際し、事前に授業を行っていたわけではない。そのため、モデル文を読み、趣旨を理解して書ける自律的な学生とそうでない学生の差が大きかった。

④ 聴解力の早期養成

今学期は毎課必ず聴解の時間を設けた。さらにウェブを利用して聴解の課題を与えた。具体的には、音声聞いてディクテーションを行うという課題、指定の文章を音読練習し、自分の音声を録音してアップデー

トするという2つの課題だった。自律学習が可能な学生には大いに役に立ったが、冬休み中の実施だったため、自己管理が甘い学生は実施せず、聴解力に差がつく結果となった。

⑤ ウェブの活用

別科では2016年度前期からFacebookを利用している。当初はスクールバスの時刻表変更、教室変更、宿題や書類提出の催促など全体への呼びかけが主な使用目的だった。2016年度後期は別科生の人数が多かったこともあり、その活用度は大幅に上昇した。別科生は全員がFacebookのアカウントを所持しており、メッセージ機能を使って欠席や病気の連絡をするなど、学生管理においても強力なツールとなった。さらに、授業の質問、日本での生活や文化的な事象の解説にもFacebookをはじめ様々なウェブサイトを利用した。中でも大いに役立ったのは、自宅学習のリソース、学習教材の提供である。在日外国人のためのNHKニュースサイトへのリンクや、礼儀作法の解説動画へのリンク、読解や漢字の宿題の解説など、多くの場面でウェブを活用した。

4. 2016年度後期の改善点

2016年度後期終了後、初級コースを修了した学生に、コース運営に関するアンケートを実施したが、回収は16名分のみであった。学期終了時、初級コースを修了した学生と、長期間の補習を要する学生が混在しており、一斉に実施するのが難しかったことと、それにより実施のタイミングが2017年度前期授業開始後となり、該当の学生に会う機会そのものを逸してしまったからである。回収した16名分のアンケートと教員の振り返りを合わせ、次の改善点が明らかになった。

a. 発音の授業の配置

発音の授業について、実施の時期をもっと早くしてほしいという声があった。間違った発音が定着してからでは遅いというのがその理由だ。確かにその通りであるが、例文の意味がよく理解できない段階で発音の授業を実施しても効果があるかどうか疑問が残る。また、2016年度後期は発音が専門の教員が全ての授業を実施したが、今後も全クラス同じように対応できるか、1クラス何名が適切なのか、教材教具はどうか

ど、教員側の対応も含めて検討しなければならない。

b. 「週末作文」の課し方

前章でも述べた通り、「週末作文」は文法の授業時間を確保しつつ、早い段階から作文に慣れてもらう目的で始めた活動である。書くこと自体への慣れという点においては有効な活動であった。「週末作文」には、モデル文がある。それを読んで構成を理解し、最初はモデルを参考にしつつ書いていく。Bクラスの作文の中には、内容の豊かさや正確さ、創造性の点からも優れたものもあった。しかし、学習の進度が最も遅いCクラスでは、モデル文を読むことが既に難しく、その中から使える表現をピックアップし、語彙を探して代入するだけでも困難だったようだ。Cクラスは「週末作文」の提出率も総じて低く、内容の豊かさや正確さに欠けるものがあった。だが、速習である本学別科では、「週末作文」がもたらす作文への慣れは大きい意味を持つ。今後は、モデル文を読み解く、モデル文の構成を理解する、あるいはよい作文を全員で読むなど、事前事後の活動とともに行うのが最善ではないかと考える。

c. 聴解の扱い方

別科生のアンケートを見ると、コースへの要望として、「聴解練習と会話を増やしてほしい」という声がある。2016年度前期に比べ、授業内での聴解の時間は大幅に増えており、これ以上授業内で扱う時間を増やすのは難しい。しかし、ベトナム語母語話者にとって日本語の音声の聞き取りは非常に難しい(松田, 2016)。実際、2016年度後期のオリエンテーション内で、別科生自身に四技能を自己評価してもらったところ、「聞く」の5段階評価で4をつけたのは66名中1名のみで、大多数が1または2という低い評価にとどまっている。つまり、多くが困難を感じているということだ。修了後のアンケートで、学期中の自宅学習の内容を尋ねたところ、教科書の付属CDや日本語の歌を繰り返して何度も聴いたと答えた別科生もおり、努力をしていることもうかがえる。別科生全体の聴解力を養成するためには、長期にわたって繰り返し学習可能な教材の提供が必須だろう。またその場合、実施状況のチェックだけでも教員が行うことが望ましいと考える。

d. 日本人との交流

今回、AクラスとBクラスでは、課ごとに教科書の

モデル会話を暗記してみんなの前でペアで話す、もしくはモデル会話の内容を変え、新しい会話を作って発表するなどの活動をしていたが、それでも会話をもっと勉強したかったという声があがった。これは、教科書を使った会話練習だけではなく、実際に日本語を使ってみたい、つまり日本人と交流する機会がほしかったということであろう。別科生はベトナム人同士二人で学生寮に住み、アルバイトもサークル活動もできず、大学と寮を行き来するだけで1日が終わる。多国籍クラスならまだしも、ベトナム人だけのクラスにあり、接する日本人が教員ぐらいとなれば、授業外で日本語を話す機会はほぼ皆無である。中には日本人と話したいがために、休みの日にスーパーへ行き日本人に話しかける、もしくは他大学のイベントに参加するなどして、積極的に日本人と話す機会を求めに行く学生もいた。だが、来日間もないうちからそこまでできる学生の方が稀である。コミュニケーションが苦手で自分の日本語にも自信がない学生はなおのこと、ほとんどの学生は日本にいてもベトナムとほぼ変わらない生活をしている。今後は、大学側から、学内で留学生に興味がある日本人を募り交流会を設ける、もしくは日本語教師を目指す学生に授業内に会話相手として加わってもらうなどして、より多くの日本人、日本語に触れる機会を別科生に提供すべきだと考える。そうすることで、後の入学試験の面接の際にも役立つコミュニケーション能力が早期に育成できると考えられる。

e. ウェブ利用方法

これまで、別科ではウェブ上にFacebookなどのグループを作成し、グループのメンバー以外は閲覧できないよう、教員が管理してきた。今後もアカウントの管理、グループの作成、運営について引き続き注意をはらう必要がある。のみならず、別科生にも、情報開示の是非、写真や音声のアップロードと著作権の関係など、ウェブ利用時の一般的な注意点について喚起する必要がある。教員間の認識を一致させるためにも、別科におけるウェブ利用のガイドラインが必要だろう。

5. おわりに

今回回収できたアンケートは16名分にとどまり、Cクラスの学生には意見を聞くこともできなかった。今後は全ての学生にインタビューもしくはアンケートを実施する時間を設けたいと思う。

本学別科の在籍期間は、1年または1年半である。日本語とは文字も発音も何もかも全く異なるベトナム語を母語とする学習者が、大学で学べるだけの日本語力を身につける期間としては決して長くはない。しかし、彼らの多くは金銭面の問題などから、できる限り早く別科での学習を終えて大学に入りたいと望み、短期間の速習に挑む。もちろん、それには相応の覚悟が必要であり、実情は誰の想像よりも苛烈である。この半年、我々教員は別科生たちに、「今まで生きてきた中で一番勉強するように。楽しいことは全て学部に入ってからだ。」と言い続け、顔を見れば宿題、二言目には勉強、起きている間は常に机に向かえと発破をかけてきた。学生たちはそれに応え、必死に勉学に励み続け、ほとんどの学生が半年で初級を修了することができた。しかし、その一方でベトナムのような一年中暑い国から来た学生の中には、日本の寒さに慣れず病気になったり、怠けぐせが出て休みがちになったりして、速習についていけなくなった学生がいたことも忘れてはならない。このような学生が出ることなく、彼らが短期速習で大学で学べるだけの日本語を身につけられるようなコース運営とはどのようなものかを模索するために、今後も別科生たちからもらったフィードバックをもとに新たな取り組みをし、よりよいコース運営を考えていきたい。

謝辞

アンケートやインタビューに協力してくれた2016年春学期、2016年秋学期の別科生たちに感謝します。

参考文献

- 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) (2017) 「平成28年度外国人留学生在籍状況調査等について」
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2016.html (2017年11月13日最終閲覧)
- 河野俊之 (2014) 『日本語教師のためのTIPS77③音声教育の実践』くろしお出版, pp.193-194
- 松田真希子 (2016) 「ベトナム語母語話者のための日本語教育に関する総合的研究」論文要旨,
<http://www2.gensha.hit-u.ac.jp/theses-archive/theses/89a.pdf> (2017年11月13日最終閲覧)
- 長野真澄 (2015) 「滞日歴の浅いベトナム人初級日本語学習者における第二言語不安：文化適応及び経済的不安との相関」, 『環太平洋大学研究紀要 (9)』, pp.185-192
- 小野寺志津 (環太平洋大学)・安原凜 (同) (2016),

『環太平洋大学グローバルスタディセンターにおける予備教育－よりよいコース運営を目指して－』
2016年度 日本語教育学会 中国地区研究集会

佐藤由利子 (2016) 「ベトナム人, ネパール人留学生の特徴と増加の背景－リクルートと受け入れにあたっての留意点－」ウェブマガジン『留学交流』独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン2016年6月号Vol.63, p.14,

http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/_icsFiles/afieldfile/2016/06/07/201606satoyuriko.pdf (2017年11月13日最終閲覧)